



蜘蛛の糸

芥川龍之介 あくたがわりゅうのすけ

目標と
振り返り

□ わが国を代表する作家とその作品についてふれ、近代の小説や物語を読む。

一

ある日のことでございます。お釈迦様は極楽の蓮池の縁を、独りでぶらぶらお歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のように真っ白で、そのまん中にある金色のずいからは、なんともいえないよい匂いが、絶え間なく辺りへあふれております。極楽はちやうど朝なのでございましょう。

やがてお釈迦様はその池の縁におたたずみになつて、水の面を覆っている蓮の葉の間から、ふと下の様子をご覧になりました。この極楽の蓮池の下は、ちやうど地獄の底にあたつておりますから、水晶のような水を透き通して、三途の河や針の山の景色が、ちやうどのぞき眼鏡を見るように、はつきりと見えるのでございます。

するとその地獄の底に、犍陀多という男が一人、他の罪人と一緒にうごめいている姿が、お目にと

まりました。この健陀多という男は、人を殺した
 り家に火をつけたり、いろいろ悪事をはたらいた
 大どろぼうでございませうが、それでもたった一つ、
 善いことをいたした覚えがございませう。と申しま
 すのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、
 小さな蜘蛛が一匹、道端をはって行くのが見えま
 した。そこで健陀多は早速足を上げて、踏み殺そ
 うといたしました。が、「いや、いや、これも小さ
 いながら、命のあるものにちがいない。その命を
 むやみにとるといふことは、いくらなんでもかわ
 いそうだ。」と、こう急に思い返して、とうとう
 その蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございま
 す。

お釈迦様は地獄の様子をご覧になりながら、こ
 の健陀多には蜘蛛を助けたことがあるのをお思い
 出しになりました。そうしてそれだけの善いこと

15

10

5

をした報いには、できるなら、この男を地獄から
 救い出してやろうとお考えになりました。幸い、
 そばを見ますと、翡翠のような色をした蓮の葉の
 上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけ
 ております。お釈迦様はその蜘蛛の糸をそっとお
 手にお取りになって、玉のような白蓮の間から、
 はるか下にある地獄の底へ、まっすぐにそれをお
 下ろしなさいました。

*お釈迦様 P 134上3

*釈迦牟尼。仏教の開祖。苦学苦行し悟りを得た。

*ずい P 134上7

*植物の花の中心にある、おしべとめしべ。

*三途の河 P 134下5

*死後、冥土の途中にあるとされる三つの瀬。

*針の山 P 134下6

*地獄にあるとされる多くの針が突き立った山。

*翡翠 P 135下3

*光沢のある鮮やかな緑色をした玉。

こちらは地獄の底の血の池で、他の罪人と一緒に、浮いたり沈んだりしていた犍陀多でございませぬ。なにしろどちらを見ても、真っ暗で、たまにその暗闇くらやみからぼんやり浮き上がっているものがあると思いますと、それは恐ろしい針の山の針が光るのでございませぬから、その心細さといったらございませぬ。そのうえ辺りは墓の中のようにしんと静まり返って、たまに聞こえるものといつては、ただ罪人がつくかすかなため息ばかりでございませぬ。これはここへ落ちてくるほどの人間は、もうさまざまな地獄の責め苦に疲れはてて、泣き声を出す力さえなくなっているのでございませぬ。ですからさすが大どろぼうの犍陀多も、やはり血の池の血にむせびながら、まるで死にかかった蛙かえる

のように、ただもがいてばかりおりました。

ところがある時のこととございませぬ。なにげなく犍陀多が頭を上げて、血の池の空を眺めますと、そのひっそりとした闇の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一筋細く光りながら、するすると自分の上へ垂れてまいるではございませぬか。犍陀多はこれを見ると、思わず手を打って喜びました。この糸にすがりついて、どこまでも上つていけば、きっと地獄から抜け出せるのに相違ございませぬ。いや、うまくいくと、極楽へ入ることさえもできませぬ。そうすれば、もう針の山へ追い上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもあるはずはございませぬ。

こう思いましたから犍陀多は、早速その蜘蛛の糸を両手でしっかりとつかみながら、一生懸命けんめいに

上へ上へとたぐり上り始めました。もとより大どろぼうのごとでございますから、こういうことは昔から、慣れきっているのでございます。

しかし地獄と極楽との間は、何万里となくございますから、いくら焦^{あせ}つてみたところで、容易に上へは出られません。ややしばらく上るうちに、とうとう韃陀多もくたびれて、もう一たぐりも上の方へは上れなくなつてしまいました。そこで仕方がございませぬから、まず一休み休むつもりで、糸の中途^{ちゆうと}にぶら下がりながら、はるかに目の下を見下ろしました。

すると、一生懸命に上ったかいがあつて、さつきまで自分がいた血の池は、今ではもう闇の底にいつの間にか隠^{かく}れております。それからあのぼんやり光っている恐ろしい針の山も、足の下になつてしまいました。このぶんで上つていけば、地獄

15

10

5

から抜け出すのも、存外わけがないかもしれません。韃陀多は両手を蜘蛛の糸に絡^{から}みながら、ここへ来てから何年にも出したことのない声で、「しめた。しめた。」と笑いました。ところがふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、数かぎりもない罪人たちが、自分の上った後をつけて、まるで蟻^{あひ}の行列のように、やはり上へ上へ一心によじ上つてくるではございませぬか。韃陀多はこれを見ると、驚^{おどろ}いたのと恐ろしいのとで、しばらくはただ、大きな口を開いたまま、目ばかり動かしておりました。自分一人でさえ切れそうな、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに堪^たえることができましょう。もし万一途中で切

*むせぶ P 136 上 16

食べ物や飲み物などで息をつまらせ、せきこむこと。

れたといたしましたら、せつかくここへまで上つてきたこの肝腎かんじんな自分までも、もとの地獄へ逆落として落ちてしまわなければなりません。そんなことがあつたら、大変でございます。が、そういううちにも、罪人たちは何百となく何千となく、真つ暗な血の池の底から、うようよとはい上がつて、細く光っている蜘蛛の糸を、一列になりながら、せつせと上つてまいります。今のうちにどうかしなければ、糸はまん中から二つに切れて、落ちてしまうのにちがいありません。

そこで韃陀多は大きな声を出して、「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は俺われのものだぞ。おまえたちはいったい誰に聞いて、上つてきた。下りろ。下りろ。」とわめきました。

そのとたんでございます。今までなんともなかった蜘蛛の糸が、急に韃陀多のぶら下がって

る所から、ぷつりと音を立てて切れました。ですから韃陀多もたまりません。あつというまもなく風を切つて、こまのようにくるくる回りながら、みるみるうちに闇の底へ、真つ逆さまに落ちてしまいました。

あとにはただ極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりでございます。

三

お釈迦様は極楽の蓮池の縁に立って、この一部始終をじつと見ていらつしやいましたが、やがて韃陀多が血の池の底へ石のように沈んでしまますと、悲しそうな顔をなさりながら、またぶらぶらお歩きになり始めました。自分ばかり地獄か

ら抜け出そうとする、韃陀多の無慈悲な心むじひが、そ
うしてその心相当な罰ばつを受けて、もとの地獄へ落
ちてしまったのが、お釈迦様のお目から見ると、
あさましくおぼしめされたのでございましょう。

しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんなことに
は頓着とんちやくいたしません。その玉のような白い花は、
お釈迦様のおみ足のまわりに、ゆらゆらうてなを
動かして、そのまん中にある金色のずいからは、
なんともいえないよい匂いが、絶え間なく辺りへ
あふれております。極楽ももう昼に近くなったの
でございましょう。

《出典》『芥川龍之介全集 第二巻』によった。

*無慈悲 P 139 上1

思いやりやあわれみの心がないこと。

*うてな P 139 上7

「台」の意味から転じて、花びらの部分。

この教材で学ぶ漢字

新出音訓
134 極楽 (ゴク・きわめる)
135 報あはいる (むく・いる)

135 端 たん はた 片端 道端	135 匹 ヒツ ひき 数匹 匹敵	134 緒 シヨ お (チヨ) 情緒 へその緒	134 透 トウ すく 透明 透ける	134 晶 シヨウ 結晶	134 獄 ゴク 脱獄	134 覆 フク おおう 覆面 目を覆う	134 咲 さく 返り咲き
137 隠 イン かくす 隠れ家	137 途 ト 途上	136 懸 ケン かける 懸命 賞金が懸かる	136 闇 ヤミ 夕闇	136 沈 チン しずむ 沈着 夕日が沈む	136 浮 フ うく 浮上 浮かれる	135 踏 トウ ふむ 雑踏 足踏み	
139 頓 トン 整頓	139 罰 バツ 罰金 罰があたる	139 慈 ジ 慈愛	138 腎 ジン 腎臓	138 肝 カン 肝臓 肝がすわる	137 堪 カン たえる 堪えがたい	137 驚 キョウ おどろく 驚異 驚かす	

作品解説 『蜘蛛の糸』

この小説にはいくつかの教訓が示されているように見える。例えば、善い行いには善い結果、悪い行いには悪い報いが待っているということ、あるいは自分一人の利益だけを考えるとはならないということ、などなど……。だが、よく考えてみると、同時にいくつかの疑問点も浮かび上がってくるのではないだろうか。

仮にあなたが韃陀多であったとしたならば、どのようにふるまうだろうか。糸に大勢の人間がぶら下がるのを黙って見ているだろうか。あるいは全員で助かりたいと心の底から願うことができるだろうか。また、そのような人間が、そもそも盗みなどをはたらくものだろうか。

お釈迦様は韃陀多を地獄から救い出してやろうと考えて、蜘蛛の糸を垂らすのだが、これは結果的には大変残酷な仕打ちでもある。ここからは何か韃陀多の気持ちを試すような意地の悪さが感じられてこないだろうか。

あえていえば、韃陀多はもともと不可能に近い試みに挑戦し、そして人間の弱点を隠さず、あえなく失敗した。このように考えてみると、与えられた条件の中で必死に生きよう

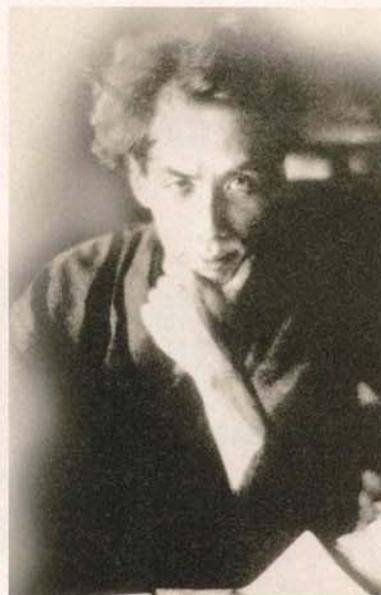
とする人間のせつなさ、あるいは生まれながらにしてもっている弱さのようなものが浮かび上がってくる。

作品の最初と最後に登場する蓮池の風景は、韃陀多たちの世界とお釈迦様、そのどちらをも包み込む、より大きな世界を暗示しているようだ。たしかに韃陀多は「お釈迦様のお目から見ると、あさましくおぼしめされた」かもしれない。しかし、私たちは時に自分勝手な行いで人を傷つけたりしながらも、日常の世界で懸命に生き続けている。必ずしもそのどちらか一方が正しく、一方がまちがいのというわけではない。人間の醜い生きざまと、そこから離れたお釈迦様の世界、さらにはその両方を包み込む、より大きな世界が示されているのではないだろうか。

そもそも、蜘蛛の糸に何人もぶら下がるわけがないし、何万里もの距離を一人で上りきれぬわけもないだろう。これらはいずれも、人間のある側面を強調するために編み出されたつくりごとの世界である。小説は単なる教訓としてあるのではない。実は一人一人の中にあつて日頃気づかずにいる、もう一人の自分に出会うために作られた、巧妙な言葉の装置なのである。

芥川 龍之介

[1892 — 1927]



一八九二（明治二十五）年三月一日、東京市京橋区入船町（現在の中央区明石町）で生まれる。生後まもなく、本所区小泉町（現在の墨田区両国）にある母の実家、芥川家に預けられる。芥川家は、行儀作法に厳しいが、遊芸に親しむ家風だった。その中で、芥川の感性や感覚の細やかさが形成されていく。

東京帝国大学在学中に、夏目漱石の木曜会に出席し、以後門下に入る。「鼻」が漱石に高く評価され、作家活動に入る。「今昔物語集」などの古典を題材に、これを現代人が受け入れやすいように書きかえていく方法を得意とした。

わずか十二年足らずの創作活動ではあったが、日本の近代文学に理知的な作風を確立した功績は大きい。

「我々の最も誇りたいものは我々の持っているものだけである。」

——「河童」



一八九二（明治二十五）年

東京市京橋区入船町に生まれる。

一九〇四（明治三十七）年（12歳）

芥川家に養子に入る。

一九一〇（明治四十三）年（18歳）

東京府立第三中学校卒業。

一九一三（大正二）年

（21歳） 第一高等学校卒業。

一九一四（大正三）年

（22歳） 久米正雄や菊池寛らと第三次「新思潮」を創刊。

一九一五（大正四）年

（23歳） 「羅生門」を発表。漱石の門下に入る。

一九一六（大正五）年

（24歳） 「鼻」を発表し、漱石の激賞を受ける。東京帝国大学英文科卒業。

一九一八（大正七）年

（26歳） 塚本文と結婚する。「蜘蛛の糸」を発表。

一九二〇（大正九）年

（28歳） 長男の比呂志が誕生する。この頃から河童の絵をしきりに描く。

一九二二（大正十）年

（29歳） 新聞社の海外視察員として中国を訪問後、しだいに体調を崩し、病に悩まされるようになる。

一九二六（大正十五）年

（34歳） 神経衰弱がたたり、不眠症となる。

一九二七（昭和二年）

（35歳） 死去。



少年 芥川

成績は抜群に 優秀

中学の成績優秀者は高等
学校への無試験入学が許可
される制度が施行され、そ
れに選ばれるほど優秀だっ
た。



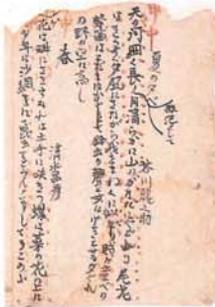
絵の才能も あった

芸術にも秀でており、色
彩豊かな作品を描いた。



回覧雑誌を 作成

小学生の頃から雑誌に作
品を書いており、漱石の
『吾輩は猫である』をもと
にした「吾輩は犬である」
などを創作していた。

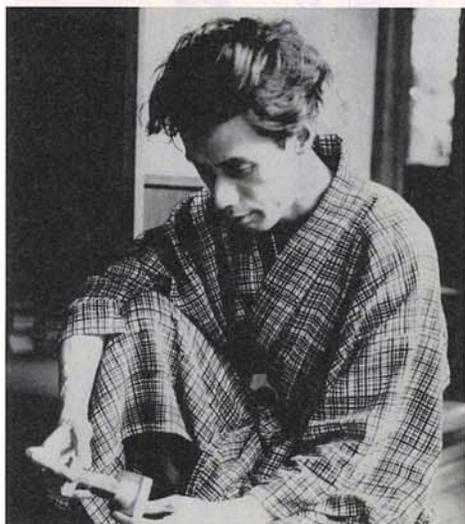


読書に夢中に なった 少年時代

芥川が育った家には本
があふれていた。それら
を入りに、幅広い種類
の本を読み、読書に親し
むようになった。写真は
養母トモと芥川。



小説家 芥川



妻と息子たち

二十六歳で塚本文と結婚。
長男・比呂志、次男・多加
志、三男・也寸志。



漱石の弟子 だった

第四次『新思潮』の創刊号に掲載した『鼻』が夏目漱石に高く評価されたことで、世に出ることになった。

夏目漱石

一八六七—一九二六

小説家、評論家。



「芥川賞」の創設



学生時代からの親友、菊池寛らが、芥川の業績を称賛して設立した。日本で最も有名な文学賞とされ、現在でも続いている。

菊池寛

一八八八—一九四八

小説家、ジャーナリスト。



澄江堂

河童を好んで 描いた

さまざまな趣向を凝らし、オリジナリテイーあふれるものであった。

